挾間町における禅宗文化の学習事始め
～狭間一族と禅宗文化①～

梅野敏明

挾間町において、禅宗寺院はその数が多く、地域に根付いた存在となっている。このことは現由布市において、挾間町の宗教文化の大きな特徴となっている。このことはやはり狭間氏が開いた龍祥寺の存在が大きい。筆者は挾間史談会の報告に参加し、各会員の報告や意見を拝聴させていただくうちに、龍祥寺を中心とした禅宗寺院の本末関係にとても興味を持つにいたった。この挾間町内における禅宗寺院のネットワークが挾間町の歴史の大きな遺産であり、この遺産の学習・研究、『挾間史談』での発表という事業に正面から取り組むことが今後の挾間町の地域おこしにつながると筆者は確信している。そして、力を失いつつある地域社会の活力を取り戻す一助となれば幸いである。

しかし、今まで挾間町において禅宗文化の学習が進展しなかったのは史料の少なさもさることながら、「禅宗は難解である」というイメージが先行していたように思う。実際、この原稿を執筆するまでには筆者自身にも力不足や迷いがあり、なかなか原稿を書く筆が遅々として進まなかった。

だが、私には狭間氏が龍祥寺を建立したのは戦乱で荒廃していく精神の拠り所や禅僧による導きが必要であり、それは狭間氏のみでなく、挾間町に住んでいた民衆も求めていたからだという確信があった。その確信の根拠として、筆者がたまたま出会った南北朝時代における肥後国の菊池氏と曹洞宗の禅僧である大智（だいち）和尚との精神的なつながりをあげたい。

南北朝時代の菊池氏惣領である菊池武重に招かれた大智和尚は、菊池氏の領内に曹洞宗の寺院を建立してもらい、自身が唱える曹洞宗の禅の教えをもって、菊池氏一族の精神的な支柱として存在しつづけたのである。この大智和尚の存在は南北朝時代において、惣領家を離れつつあった庶子家をつなぎとめ、惣領制を維持していくという効果を発揮したと菊池氏を研究している歴史研究者から評価されている。

図１：大智和尚

狭間氏が禅宗に対して期待したのは、龍祥寺を中心とした禅宗寺院のネットワークを通した狭間一族や地域社会の再編成ではなかったのではなかろうかと筆者は考えている。

菊池一族における大智和尚のような精神的支柱としての役割を期待されたのが放牛光林和尚であっただろうと私は考えている。

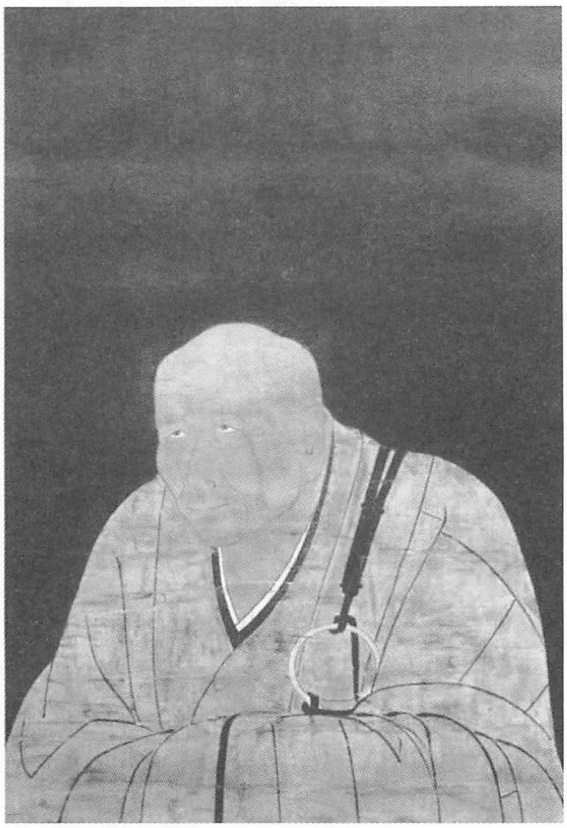

図２：放牛光林

しかし、今の筆者の力量では狭間一族の去就や挾間町における禅宗寺院のネットワークを通して、挾間町における精神文化の全体像を描くことは難しい。そこで、私は挾間町を対象にして、その禅宗文化や狭間一族の歴史を学習し、研究していくことにしたい。そして、その成果を挾間史談の例会で報告して会員諸氏のご教示を仰いだうえで、『挾間史談』にて、「狭間一族と禅宗文化」と題して、その成果を連載していきたい。